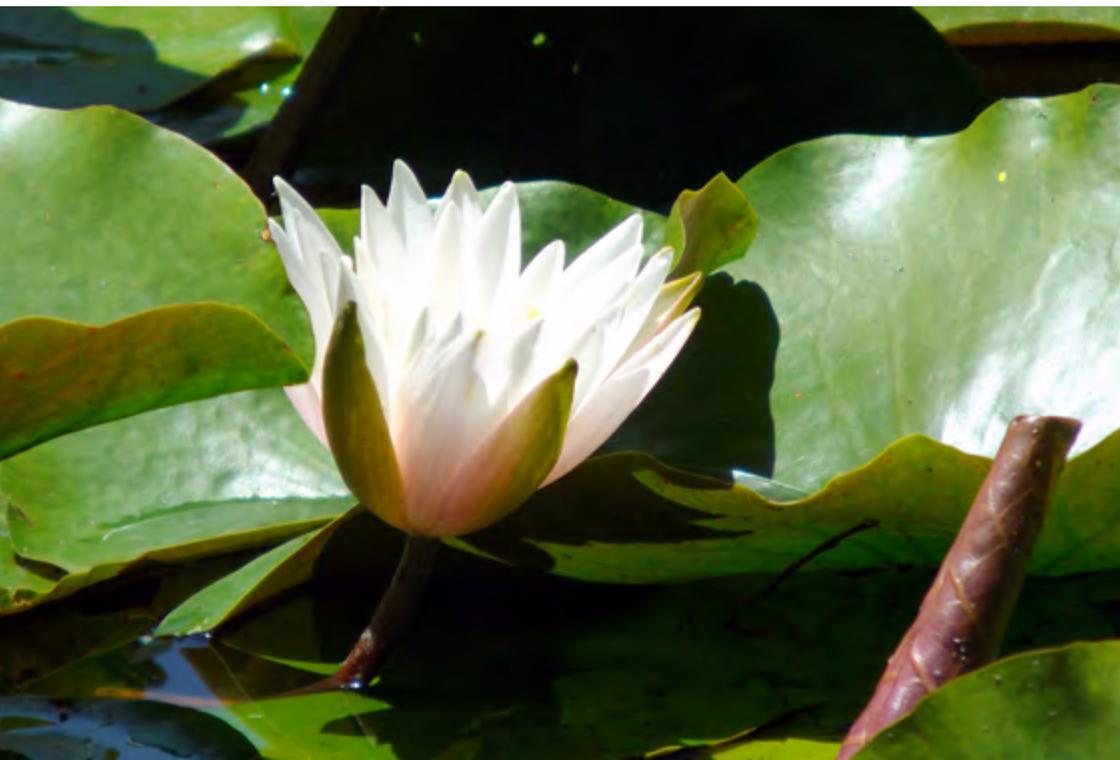


あそ

6

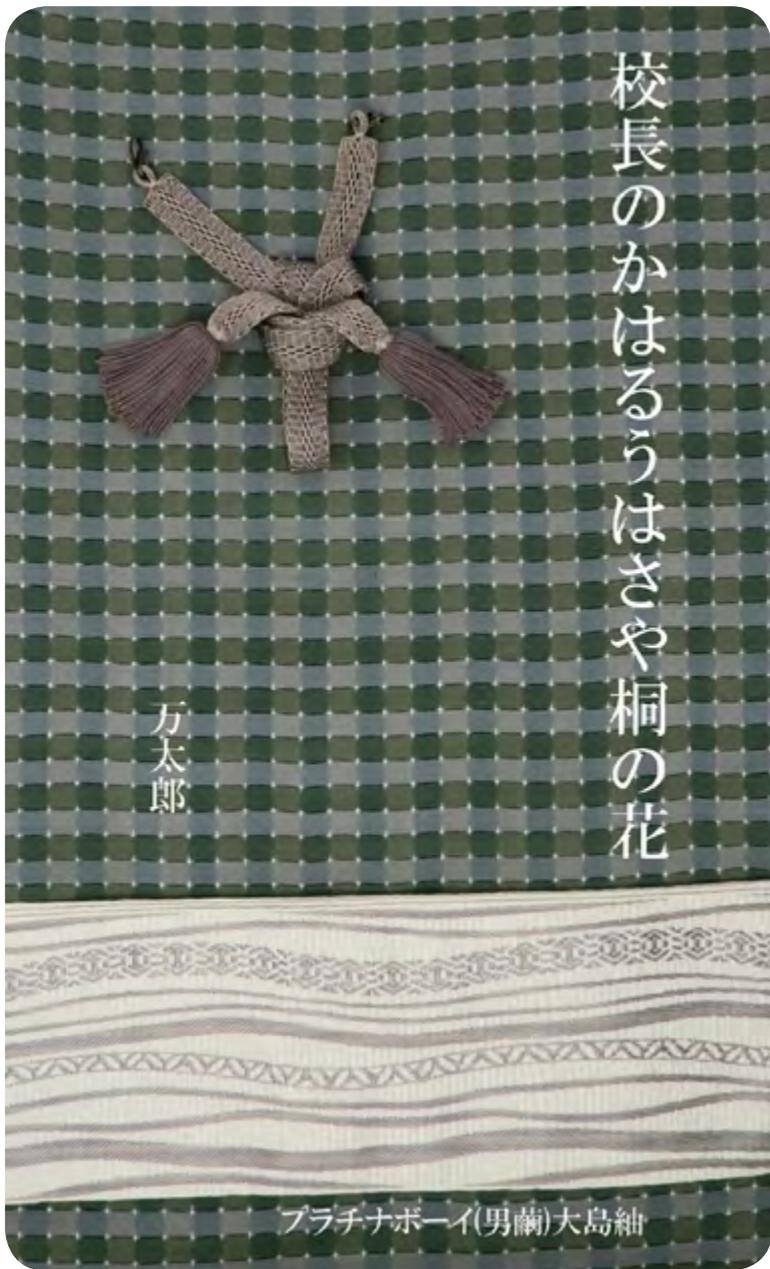
2018



校長のかはるうはさや桐の花

万太郎

ブラチナボーイ(男蘭)大島紬



# あそ

六月



東京 佐藤 喜孝

## 破顔

破顔のみその他抹消花の雲  
辭書にきく眞實一路蝮の水  
せつなきよ原發用のパンパス  
喜之介かと立浪草によびかける  
おとなりの星もパチパチ春更けし

東京 石森 理和

## 茶粥

欄干に十五羽ずらり雀の子  
逞しき新芽七本君子蘭  
竹の花新たな出会ひありさうな  
春若葉糖尿病脱出医師絶賛  
焙じ茶の茶粥を作る若芽どき



埼玉

大日向幸江

草餅

草餅の香漂ふ調理室  
一斉に梅雨入りを云ふワイドショー  
冬瓜を下げて暖簾を出て行くや  
黒揚羽大仏殿の闇に入り  
猫の子はいらんかね満天星つつじ

東京

七郎衛門吉保

福島

少年隊戊辰に散りて今サクラ  
花は葉に料金無料と滝桜  
花は散り散らぬ菜の花主役かな  
彩雲と花桃コラボの天地人  
安達太良や千恵子の声に山笑ふ

東京

篠田純子

風青し

繫留の小舟ゆんらり水温む  
啓蟄やぶうぶうメール受信音  
飲む薬塗る貼る薬風青し  
朝採りの胡瓜に夜の温度あり  
濠の白鳥餌を欲り寄れり青葉風

石川

定梶じょう

うまごやし

待たされておたり踏切春日傘  
峡抜けてまっすぐの川温みけり  
万愚節しゃっくりいつの間に止まり  
塵芥車時めき花の下すすむ  
ねころんで雲の行くかたうまごやし

埼玉

須賀 敏子

桜草

葉桜や新富橋の喫煙所  
秩父路のかなり大きな鯉幟  
八王子中央高速山桜  
咲月十四日  
桜草咲いてあなたの誕生日  
春愁や御徒町にて指輪売る

埼玉

竹内 弘子

和服著て

青田道きて検診の列につく  
食べるたび頤が鳴る桜どき  
和服著てゆくところなし亀鳴けり  
煮魚の眼を舐りをり春の暮  
青葉冷え足にまつはり魚板打つ

東京

田中 藤穂

花の頃

花を浴び老女のお辞儀ながながと  
遊水池ひばりの声の充満す  
花見よと回転椅子に案内さる  
岐れ道連翹垣に沿ひこよと  
高らかに鳴き庭去らず鶯は

三重

長崎 桂子

夏近し

また春寒溜息そつと木戸を掃く  
戸惑ふや今朝は晴天花三分  
花過ぎて花の道踏み行しめてく  
夏近し玄関辺り土いぢり  
肩を出しタイムウオッチ走る夏近し

東京 森 なほ子

行く春の

花散つて疎水の鉄路さびさびと  
花びらの虚空に蝶の動きせり  
お迎への母にすがる子四月かな  
行く春の鷗の翼しなやかに  
春愁やかもめの脚のはがね色

東京 赤座 典子

桜めぐり

再会の花見弁当座して  
梅桃桜三春に在す滝桜  
春の虹車窓を丸く囲みける  
放射線量表示かげろふ常磐道  
落花積む岳温泉の桜坂

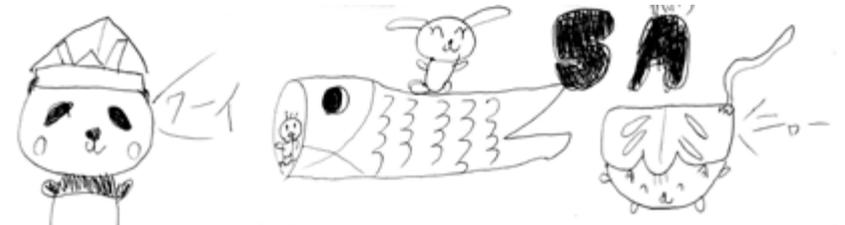
埼玉 秋川 泉

花

水鳥の遊びしところ花いかだ  
散りつもる花に埋もれて泣く童  
車いす花舞ふ中にくり出せり  
花吹雪長屋門入る五十人  
くるくるとをのこの回す春日傘



ケチャップのプシュッと果てし花の下	佐藤喜孝
雉鳴けり雛も顔出す草の原	秋川 泉
眩しさや透きとほるほど女子高生	石森理和
さざめごと起きる茶室や豆御飯	大日向幸江
春風やペタル漕ぐ靴真新し	黒澤佳子
初蝶や子等に負けじと川遊び	七郎衛門吉保
ペットシヨップの猫寝てばかり梅の花	篠田純子
叱られてゐるやう一花木瓜赤く	定梶じょう



桜まじ島から島へ船長さん	須賀敏子
水中花手足重たくなりけり	竹内弘子
知らぬ間に薺花咲く縁の下	田中藤穂
仲春の雲の動きはゆるりかな	長崎桂子
デュエットをしてゐる鳥日永し	森なほ子
椿掃く日に戻りぬと伝へたし	赤座典子
ハロン湾墨を零して大霞	七郎衛門吉保

喜孝抄



人こへば妻飛んでくるフリージア

佐藤 喜孝

フリージアの花の中に恭子さんがいらっしやる。あたたかい明るいほほえみをたたえて。周囲が明るくなる花。香も豊かで飾らないあたたかなお人柄を黄色のフリージアに想いました。(泉)

金銀と号外の舞ふ春の宵

赤座 典子

全編オリピックの句だったので、平昌に行かれたのかと思っただけですが？テレビで観戦されたのかとも思いました。現地ならではの生々しさがないので、やはりテレビかなど。私も毎日テレビ観戦、勝者敗者のさまざまなドラマに感動した一人です。(なほ子)

春の星数へながらに葱を抜く

秋川 泉

葱を抜きに夕方外に出ても、もうそれほど寒くありません。見上げるといくつか星が。ああ、春の星になったと思う作者です。生活の中の季節感が良いと思います。(なほ子)

兄達の齢を越せりおでん鍋

石森 理和

さりげない中に感慨があります。「父母の歳を超えた」という句はよくありますが、これは「兄達」です。作者のお歳からいつて、お兄様達もそれなりのお歳まで生きられたのではないのでしょうか。妹である作者を可愛がってくれたことでしょうか。きょうだいをなくすのは、親とはまた違った寂しさがある

ように思います。一緒におでん鍋を囲んだ遠い日々を懐かしく思い出す作者です。そこには現在の家族とは違う、もう一つの家族が確かにあったのです。(なほ子)

大雪やとろとろと煮たカレー

大日向幸江

外は大層な雪がしんしんと降り積もっている。もうどこへも外出することもなく、今夕はゆっくり丁寧にカレーを作る。「とろとろとろと」と煮込むカレーがとても美味しそうです。寒い日のカレーは身体の中からあたたまり格別のご馳走ですね。(泉)

蓮二節包む新聞カラー刷

黒澤 佳子

蓮根を二節新聞紙に包んだ、ただそれだけの句ですが、蓮根のごつごつ感と派手なカラー刷りの新聞紙のがさがさ感が鮮やかに伝わってきます。広告かスポーツ紙か、その色のケバケバしさが作者はちよっ

と気になっているのかもしれない。(なほ子)

レジェンドと云はれ空飛ぶスキーヤー

七郎衛門吉保

この句の「空飛ぶ」が全てを表しているいいですね。平昌冬季五輪の葛西紀明選手。史上最多計八回の冬季五輪に出場。スキージャンプの選手としては異例の二十年以上のキャリア。その人となりは多くの人々から愛され「レジェンド」と呼ばれています。葛西選手の「空飛ぶジャンプ」いつまでも見たいものですね。

女子寮生の誰も彼も失恋梅の花

篠田 純子

女子寮シリーズまた一つ。ほほえましいといったら失礼かもしれませんが……。失恋も若さの特権、みんなで嘆けば辛い、のかも。梅の花の健気さが明るさを誘います。(なほ子)

春を待つキッチンマンの醤油差 定楓じょう

キッチンマンの小瓶、そのまま醤油差しとして使えます。その小瓶は食卓の上に、食卓は台所の一隅に。台所には台所道具、おそらく日本全国共通の。キッチンではなく台所です、平均的な日本の、それも地方色の濃い……。広く大きなところから一点に絞っていく俳句の常道と逆に、小さなものからどんな広がっていきます。最後は作者の住む街へと、想像が広がっていきます。作者だけではなく、みんなが春を待っています。(なほ子)

道産娘の銅メダルなりカーリング 須賀 敏子

平昌五輪のカーリング女子の活躍は素晴らしいものでした。北海道出身の素朴で飾らない選手ひとりひとりの人柄が好感度を上げ「そだねー」の言葉は日本中を駆け巡りました。お陰でカーリングと云う

検診の予約をしなくては………と思いつつ、積極的に行動に移すことが何とも億劫です。「延び延び」という感じ。こう云う気持ち本当に分かります。思い当たることがあつてついウフフと笑ってしまいました。(泉)



競技を心から楽しむことが出来ました。(泉)

春愁にあらず老身横たへる 田中 藤穂

作者はこの冬風邪をひかれ、随分と長引いたようにお聞きしました。春になりようやく回復され、一層軽くなつてしまった身を労りながらそつと横たわることではないのですよ、と作者の声？ (なほ子)

雪積もる若き喜び老は愚痴 長崎 桂子

沢山に積もつた雪に若い頃はとても嬉しく年を経ては雪掻きの大変さ、足元の危険なこと等、心煩わせる事が多くなり喜ぶよりも先に………と云う誰もが思い当たることですね。四季の中の「雪」。それは夏に思い出すとまるで夢の世界。(泉)

検診の予約延び延び寒明くる 森 なほ子

毎月15日発売 定価300円(税別) 月刊俳句界 2018年8月号

◎ 故郷を想う ~ 誰もが持つ故郷、その魅力

大樽 雄次郎 命を懸けていませんか？  
 瀬 夫 子 妻 子  
 久 野 東 田 一 枝 伸  
 中 藤 人 高 野 貴 子  
 山 本 中 代 子 名 村 早 智 子  
 特 口 伸 福 本 伸 樹  
 豊 田 隆 神 野 伸 樹  
 特 口 伸 樹 藤 本 伸 樹

◎ 恋の句の引力

藤 田 若 之 藤 野 美 穂 大 高 隆  
 補 川 隆 子 藤 本 伸 樹 宮 子 藤 本 伸 樹  
 若 藤 隆 代 子 藤 本 伸 樹 藤 本 伸 樹

◎ 次井隆樹「花畑」

佐 藤 隆 樹 日 本 文 学 研 究 会  
 藤 本 伸 樹 三 太 夫 文 学 研 究 会

◎ 中村和弘 加古宗也

株式会社文学の森 TEL.03-6262-9196 URL http://www.jungku.com/



佐藤喜孝

森 なほ子

バイク二つ番のやうに春夕べ  
あつさり乳離れの女兒苺吸ふ  
弧は孤なりレインボーブリッジ春空に

大胆な物言ひ、大景。スカッとする読後感。うっかりすると間違へさうに似てゐる孤と弧。辞書の「孤」の例文として國木田独歩の「神の子」（無窮の天地に介立する此生の孤なるを感じて思はず岸に伏して声を放つて泣いた）。ドラマで日本男児はよく泣くと外国では驚かれたとき。明治の男子も泣いてゐたやうだ。何度か読んでゐたらレインボーブリッジが本物の虹の橋になり「弧は孤なり」とそっくり反つてゐた。

井上 石動

行く春を嵐電駆つて惜しみけり  
若竹の大きく伸びよ空の奥  
白玉の器なな色 貴船川

京都を愉しまれてゐる三句である。伸びやかに詠はれてゐる中にも「嵐電駆つて」といひ、「空の奥」といひ、「器なな色」と、表現への意欲が伺へる作品である。特に嵯峨野の篁を映像で拝見するだけだがそれでも常の篁とは違ふやうだ。若竹により空には奥があることを知らされた。

若竹や夕日の嵯峨と成にけり 与謝蕪村

石森 理和

たわわなる庭の金柑いと甘し  
恙無く過ごすは至難杉花粉  
子子の 上下運動 早々に

孵化したポウフラは空気を吸ふために水面まで上がる。その屈伸運動は見やうによっては可愛いもの。作者

てゐることを「囀りて」としたと読める。ならば季語の「囀」では無くなるどころが難。

秋川 泉

上棟式花の舞ふ日に寿げり  
花吹雪 棟梁の撒く四方餅  
花吹雪舞ふ中に受く四方餅

上棟式に餅を撒く習慣があることは知つてゐたが為たことはない。撒く餅を四方餅といふとある。華やかな上にも華やかな俳句だ。作者の喜びが句からあふれ出てくる。

よし焼や雨後の点火に手間取りぬ  
よし焼の次々鳥の飛び出せり  
うすあかり雪の果てなる港街

この三句は前月に採りあげる作品だがわたしのミスで今月にさせて戴いた。俳句ではよく眼にするが実際には見たことがない。よし、を仮名にしたのは何故だらう。よし、あし、に拘つたのだらうか。見てない者が添削する危惧はあるが、

もそのやうに見てゐるのだらうか。漢字を見てゐるとポウフラの動きを表してゐるやうに見えてきた。掲句の表記のほかに「子子」が使はれる。字源に拠れば子子は「水中に住む蟲。ぼうふり、蚊の幼蟲、俗に誤りて子子に作る」。子子の方は「特出せる貌。又、孤立の貌」とある。意味はそれとして「子子」より「子子」の方が動きに添つてゐるやうに見える。一部の辞書にはもう子子をポウフラと扱つてゐる。

七郎衛門吉保

小次郎も迷ふ数多のつばくらめ  
鋭角に飛ぶつばくらにあそばれり

虫を捕らへるために燕は大空を变幻自在に飛び回る。鋭角に飛べるはずはないがそのやうに見えるほどスピード感のある飛翔である。小次郎の句にしても人間くさい俳句が作者流である。

囀りて活舌戻す あえいおう

活舌は滑舌とも。「囀や」とせず「囀りて」としたのは作者らしい。「あえいおう」と活舌のために声を出し

夜あがりの葎原に來し点火の火  
又一羽飛び出してゆく葎を焼く

雪の果てはこの冬最後に降る雪。もうすぐ春の港街。  
しかし「雪の果てなる」と書くと、「雪の果」といふ季  
語とはニュアンスが違ふやうに思へて迷った。

### 赤座 典子

つくしんぼ男の子のやうに意地を張り  
読みきれずポストへ返す暮の春  
強力の写真家となり山笑ふ

三句ともドラマがある、が少々伝はりにくいかもしれない。一句目。摘み草をしてをるのであらう。子ども同士で何かの諍ひになり女の子が男の子のやうに意地を張った。男の子のやうな「意地の張り」方が、いまひとつ伝はりにくかった。

二句目。図書館で借りた本が期限までに読了せず返却箱へ投入した。ポストへ返すではなく、はつきり「図書館へ」でよいのではと思った。ポストに入れるのは図書館

館の開館時間外といふことを云ひたかつたのかも知れぬが。

三句目。強力を仕事にしてみた人が写真家になったのであらうが、強力を撮る写真家とも読める。どちらも不自然ではないので読むのに迷った。

### 篠田 純子

シャボン玉とことこ追ふ児かんばし癩ぼし走り  
シェアハウスの戸の黴臭し軋みけり  
まくなぎのまだ渦巻かぬ雨あがり

雨上がりは何とも気持ちがいい。マイナスイオンの効果だらうか。夜あがり、朝上がりといふ洒落た言葉俳句で知った。「あまあがり」「あめあがり」口にするとときどちらにしやうか迷ふ。

何処かで雨宿りをしていたまくなぎが少しづつ出てきた。まだ渦を成すほど揃っていないらしい。雨上がりの雰囲気を捉えられてゐる。マイナスイオンも増えて来きうだ。まくなぎの姿を確り見た人は少ないことだらう。一匹や二匹眼前を飛んでゐても分からない。まくなぎは

糠蛾の古名、古くは「まぐなぎ」と云つたとか。目に見えるかだうかといふ小さな羽虫に仰々しく「蠖蠖」は何とも可笑しい。

### 須賀 敏子

春の風湖面に写る山を消し  
「許さない」兜太の字なり四月尽  
ほろほろとボンネットにも落椿

散歩道の駐車場におしゃれな色のマイカーを見かける。或ところでは真つ赤な自動車が、鉢植えに囲まれて簡単には動けない状態。鉢は全てセラニウム。色とりどりのセラニウムに囲まれて幸せさうな車であった。或ところでは紅梅の下が駐車場。濃紺のボンネットに散つた花の色は咲いてゐる花より綺麗だった。掲句の椿も色が見えてくると……。少し残念。また「ほろほろ」は椿の落ちやうに合はないのではないだらうか。

### 田中 藤穂

芽吹きぬてハンカチの木は花未だ

老いといふ春愁に似て非なるもの

俳句はだうしてこの短い文体で心の内を吐露できるのか不思議だ。頭の中はある程度論理的に整理されてゐるかも知れぬが、心にはえもいはれぬものが棲み、その持ち主にさへ扱ひに困る。老いて知るうれひ、あるひはうれひのやうなもやもやとしたもの、誰もが感じた青春に覚えた春愁とは似てゐるやうだがだうも違ふ、と作者はいふ。掲句は「非なるもの」と断定してゐるところが少々寂しい。老人用の春愁があつてもと泉下の八田木枯さんなら云ふのではないか。四月号の同作者の  
春愁にあらず老身横たへる  
と比べると、掲句には理で治めたところがあり少々落ちる。

ソダネーと誰かに言ってみたい春

こちらは明るい。流行語を句に取り入れて成功してゐる。流行語だから説明は要らぬ。タモリもプラタモリで笑いを取つてゐた。しかしアクセントが難しいので使つてみたいが難しさうだ。掲句「春」が技あり。

定櫛じょう

櫛の芽や包む虎屋の包装紙  
臙の夜出来皿をとり落とす  
初蝶の上昇時に訥々たり

虎屋といへば羊羹の老舗と知られてゐる。句はご近所  
さんから櫛の芽を頂いたごあいさつ。地方新聞ではなく  
虎屋の包装紙と云ふのがをかしい。

臙の夜の句、こちらはただ皿を落としただけを句にし  
た。大事な皿かも知れぬが句にはなかなか難い。と  
ころが「出来の一語で何とも嘯み応へのある句になる。  
作者のその時の驚きまで共有できる。普段は使ひにくい  
出来しゅつたい」が生かされ、また「出来しゅつたい」で活かされた俳句。

長崎 桂子

急転な日蹴散らし蒼天初燕  
今朝晴れる鳴立て仲間呼ぶ蛙  
ピンクのチョゴリ桜並木を自転車で

高島茂にもチマチョゴリの句があつたが思ひ出せな

い。たしか緑色ではなかったかと思ふ。掲句は桜並木を  
颯爽と走るピンクのチョゴリ。分らないので調べたら  
チョゴリが上着でチマが巻きスカートと。日本にはない  
ハツとするやうな華やかな色の光景であつたであらう。

七郎衛門吉保

ハロン湾墨を零して大霞  
九份のお茶とランタン春時雨

特別作品より。

特別作品は他結社でもさうだが旅行吟が多い。まだ見  
ぬ土地の風物を読み伝へるのであるから難しいのは当た  
り前。特に外国詠になると季語の扱ひにも多くの俳人が  
苦勞してゐるやうだ。前句、ハロン湾とあるので調べて  
みた。ベトナムの世界遺産とある。前知識はこの位にし  
て句に戻る。「墨を零して」に感心した。大霞の中に墨  
を零したやうな風景。一滴一滴零した墨が滲んだやうな  
えもいはれぬ映像が浮んで来た。集中の白眉である。

九份は台湾。『千と千尋』の湯屋のモデルと云はれて  
ゐる建物があるさうだ。旅情纏綿たる春時雨の風景。お  
茶とランタン、素直に堪能させていただいた。

あをキーワード俳句辞典(なみーなみ)

波

梅ひらくガラス波打つ窓淨し  
さざ波の囁いてゐる春隣  
なにゆゑかしらず波たつ春の水  
千里浜梅雨の白波一文字  
昼顔や波音の無き日本海  
波風のもとより立たぬ蜷の道  
金魚草千倉の海に白い波  
足ざぶと波蹴る人に初夏の風  
青田波グラデーションを楽しむぬ  
野生菊日と風と波はねかへす  
銀杏黄葉漣にまた大波に  
引く波の砂に音あり冬の月  
波しぶき浴びて五月の海と空  
白波のはたと走せけり稲光  
一里来ても波音雁の空昏れぬ  
歩いて冬あるいても冬筑波山  
枯石路に波の砕けて城ヶ崎  
細波を葉裏に映す若楓  
佐渡泊波の高さにつぼめ魚  
正確に岩叩きをり卯月波  
大川の波のかつほど盆の唄  
親しめり心波打つ日の冬芽

石森 理和  
山莊 慶子  
佐藤 喜孝  
長崎 桂子  
芝 尚子  
竹内 弘子  
田中 藤穂  
鎌倉喜久恵  
早崎 泰江  
長崎 桂子  
東 亜 未  
鈴木多枝子  
森山のりこ  
定櫛じょう  
渡邊 友七  
堀内 一郎  
須賀 敏子  
石森 理和  
佐藤 恭子  
鈴木多枝子  
佐藤 喜孝  
篠田 純子

どこまでも稲の波湧く美し国  
朝顔にさざ波染まり川の町  
巨津波可美葦牙彦舅尊よ  
土用波ときをり母の声ありぬ  
初筑波絶えて久しき織の音  
恋雀軒の波付トタンかな  
寄る波にうつらうつらと破れ昆布  
冬燈慕ひ寄りくる沖つ波  
ちぬ釣や夕波なつかしく寄する  
奥庭の波目すがしや夢窓の忌  
冬夕焼波折の色のとめどなく  
波ひとつ動きだしたる加留多かな  
花ふぶく田安門より人の波  
久米島のスクールに濡れ波に濡れ  
朝焼けやさざ波たちて秋の湖  
冬ざるる波の浮き寝のカジノ法  
鯛起し堀のトタンが波うてる  
丁寧な波たたみくる初渚  
波がのどか浮木ものどか見てそして  
波一枚一枚ごとに乗るサーファー  
錦鯉沼に尾鰭の波立り  
α波と波音ばかり秋の雨  
スカラ座へ向ふ人波夏夕べ

佐藤 恭子  
山莊 慶子  
佐藤 喜孝  
堀内 一郎  
大日向幸江  
定櫛じょう  
竹内 弘子  
佐藤 喜孝  
定櫛じょう  
井上 石動  
佐藤 恭子  
佐藤 恭子  
秋川 恭子  
秋川 恭子  
秋川 恭子  
秋川 泉  
七郎衛門吉保  
定櫛じょう  
森 なほ子  
定櫛じょう  
大日向幸江  
七郎衛門吉保  
篠田 純子  
森 なほ子

# 亜細亞船旅

赤座典子

百万ドルの春灯に沿ひ出港す  
春の雲パステル調の天井画  
マシユマロの枕に埋む春の夢  
亀鳴くやうぬぼれ鏡船中に  
春怒涛部屋のどこかがかたかたと  
遊覧飛行島かげろふるハロン湾

高雄 二句

蓮池の竜虎の塔につばくらめ  
菩提樹の葉のからからと風光る

花蓮 二句

アミ族の歓迎舞踊春の色  
特攻基地に残りし壕や鳥曇

台北故宮博物院 二句

うららかや台湾女子の名ガイド  
春の夢北京に在りし頃のこと

佐藤喜孝著

# 青宮烏丸

を読む

十一

佐藤 恭子



## 秋日和道問ふ人を選びをり

知らない所へ出掛ける時、以前は地図をひろげて調べ、手書きにして持って出かけたものである。方向音痴なのでかく人より時間が目的地へ行くのにかかってしまう。

この句は二十年以上前の事であるから、コンピュータも一般の家庭にはなかった。今ではインターネットという便利なものがある。目的地が分れば、何の電車に乗って何分かかり、駅を降りたらどうやって歩いたら行けるか迄瞬時に分ってしまう。手書きの地図からプリンターで打出した地図にとってかわり、出掛ける時の必需品

品に今ではなっている。さて駅までたどり着いたが、どっちの方向か思案中。晴れた秋の日は気持がよいのでそれほど苦にはならないが、やっぱり道を聞かなくてはならない。

道を聞くには声のかけやすそうな人とそうでない人がいる。この句には作者がどんな人に声をかけたかは分らない。小学生くらいの子供かな、それとも若い女性かな………といういろいろ読者を愉しませてくれる。

この季語は気持よさを現すのには最適で、決して明るくはない題材であるが、とても爽やかな句になった。季

語によって句はどんなにでも変化する。

## ビニールに包まれてゐて大地なり

私が生れた東京、戦争で疎開した福島県の三春、終戦後の新潟、生れてから六年の間にいろいろな所に移り住んでいる。

東京での記憶は全くないが、三春での記憶は不思議なくらい覚えている。幼いながらも戦争という特異な環境が大人たちの言動などで少なからず常時ではない事がわかったからなのかも知れない。

そんな小さな時の事など覚えてはいるはずがないとおっしゃる方が多いと思うが、自分でも不思議なくらい記憶に残っている。

その頃の三春はアスファルトの道が少なかった。土そのものの上を下駄・はだしで歩き回って遊んでいた。土の上は柔らかかった。木の上からとびおりても、すばんと足を今おもえば受入れてくれたようだ。

あの頃はなんとも思はなかったが、今ふりかえってみ

ると一番穏やかな日々を過していたのだった。

この句は土がビニールに包まれていても土だど………。大地などはもので包めるものではない、つつむものでもないと思っていたことが之〇だったと思い知らされた。

東京ではなかなかお目にかかれないが、少し郊外へ行った時に目にした驚きが句になったのだろう。辺り一面にビニールが敷かれていた。その下で息づいている芽を目の当りにしたのかも知れない。その驚きと、感動が句心をかきたてた。

この句に季語はない。しかしこれから生れようとしている芽の息づかいがきこえた。春の息吹を感じるとともに土の素晴らしさをおしえてくれる句となっている。



## あとがき

### プリンタ

いくらプリンタの機能が進んだからと云って毎月プリンタで本を作ってる雑誌は見たことがない。昔はガリ版刷りで作ってたので本人は道具も進んだものだとは勘違いしてゐる。先月号はプリンタの不調でそちらに気を取られ扉の七郎衛門吉保さんの作品をミスってしまった。吉保さんをお願いしたところ快くお引き受けいただきプリントしていただくことになった。大感謝。五月号を挿入しますので高配よろしくお願ひします。

### ワールドカップ

夫婦してサッカー観戦大好き人間。妻は平気で大声を腹から出すのではらはらのテレビ観戦であった。ビートたけしが「ひっくり返ったやつがわざとらしく痛がって、全然ペナルティーをとられないと普通に立ち上がって走ってるから」と批判してゐると知った。レフェリーを欺くプレーの「シミュレーション」、本当に見苦しい。素人

のわたしが見てもオヤツと思ふ場面に出くはす。それともう一つ刺青と無精髭のやうな髻が嫌ひ。だからメッシはどんなに素晴らしいプレーヤーであつても嫌ひ。あとがきの日付でおわかりのやうに今日は夜更かし。苦手な買物に出かけ煎り豆を買ひ観戦の用意を調べた。妻が居ないので安心してみてゐられる。(喜孝)

二〇一八年六月号

発行日 六月二十四日

発行所 東京都中野区中央2-50-3

電話 090-9828-4244

ファックス 03-3371-4623

印刷・製本・レイアウト 竹僊房

カット／松村美智子・福井美佐子・ティリ エイマ  
表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円(送料共)／一年

ゆうちょ銀行(普)(店番018)4586402  
佐藤 喜孝(サトウ ヨシタカ)